

## 月例研究発表要旨

第249回 2010年6月30日

「娯楽と動員——植民地期台湾のラジオドラマと中山侑」

星名宏修

1920年代に始まるラジオ放送は、他国のそれと同様に「動員と娯楽」という両義的な性格を備えている。植民地台湾においては、ラジオは「国語」普及の重要な手段とみなされたため、多数の台湾人の「国語」リテラシーとはかけ離れた番組編成がなされていた。そうした状況も日中戦争の勃発をきっかけとして一変する。中国対岸からの強力な電波戦に対抗すべく、総督府としても「福建語」放送によって、動揺する島内の台湾人に戦争の意義と「正しい」戦況を伝える必要が生じたのである。大東亜戦争が始まると、占領地の民衆に日本の政策を理解させるため、マレー語など各種の言語による放送が実施された。

また戦時期において、健全な「娯楽」を提供することの重要性が語られ、ラジオがそれを担うメディアとして期待された。そのために音楽番組や落語、長唄などのほか、さまざまな「ラジオドラマ」の創作が試みられたのである。

台湾におけるラジオドラマの作成に大きな役割を果たしたのは、「湾生」の中山侑である。彼の父親は「蕃地」の警察官であり、彼自身、警察界に身をおいた人物である。現在残されている彼のラジオドラマの多くは、警察官の奮闘を描くものであり、そこには「蕃地」警官の不安や苦悩も表現

されていた。

本報告は、日本植民地期の台湾において、台湾人はどのようにラジオを受容したのかを検討しつつ、中山侑が創作したラジオドラマに描かれた「蕃地」像を論じたものである。

第250回 2010年12月15日

「ワイマール短期語学研修2010——報告と課題」

ラルフ・デーゲン／藤野寛

初修外国語を3セメスター学習した二年生を主たる対象として、4週間程度の海外語学研修に送り出す制度を立ち上げることは、懸案事項として久しく検討されてきたアイデアだったが、ドイツ語エリアでは、2010年度に実現にこぎつけ、8月1日～29日にワイマールのバウハウス大学で行われたサマーコースに19名の学生（2年生17名、3年生1名、大学院生1名。男性12名、女性7名）を送り出した。

【1】 まず、このプログラムの存在を学生に周知させることが、最初の課題となった。2010年1月上旬、つまり、翌年度の夏には2年生になっているはずの1年生が受講しているドイツ語クラス授業が終わる直前に、そのクラス授業の場で情宣を開始すべく、チラシとポスターを作製した。加えて、グーグルを使ってホームページを立ち上げた。ほどなく関心を持つ学生からの問い合わせが開始された。

3月18日に五社の参加を得て業者選定の入札が行われ、ドイツ国内の体制の充実度を主な根拠としてJTBを選んだ。この時期、ユーロ安が進行していたこともあり、プログラム経費（授業料・宿泊費・渡航費・保険）は約35万円、これに大学から一人当たり7万円（20%）の補助金が支給された。

参加定員は20名で、参加希望者がこの数を上回った場合、選抜する必要があったわけだが、当初25名が関心を示したものの、最終的な参加希望者は19名となったため、今回は選抜しなくてすんだ。

この短期語学研修では、単位取得が可能である。そのため、「ドイツ語中級@ワイマール」という授業を開講し、合計5回（4月28日・5月26日・6月16日・6月30日・7月21日）、水曜4限に設定した（デーゲンと藤野が共同で担当）。これは、参加のための準備を目的とする授業であり、語学上の準備と、さらに渡航（旅行）の準備をするためにJTBの担当者に3回お話をいただいた。また、ワイマールを「第二の故郷」と言われる平子友長教授（社会学研究科）や、過去に派遣留学制度を利用してドイツに留学した経験を持つ学生諸君にも話していただいた。（授業外では、5月26日に、ドイツ（主としてケルン）から一橋大学に留学中のドイツ人学生や元派遣留学生の参加を得て、職員集会所で懇親会を開いた。）

もちろん、準備は5回の授業に参加するだけでは十分ではない。とりわけドイツ語能力を高めるためには、あらゆる場、媒体を利用しての（個人単位での、またグループでの）自学自習が求められる。そのため、Moodleというソフトを用いたホームペー

ジを開設した。目的は二点ある。一つは、そこにドイツ語教材をアップロードすることであり、もう一つはブログを開設して学生諸君による書き込みを促すことだった。とりわけワイマール滞在中にドイツ語を書くという経験を積むためのフォーラムであり、帰国後に報告集を作る際に利用するというねらいもあった。ワイマール語学研修のホームページで、学生が作成した報告集を読むことができる：<http://sites.google.com/site/gogakukenshu/>

**【2】** バウハウス大学が主催するドイツ語サマーコースは、10レベルに分かれる10のクラスからなり、全体で約150人が参加する。1クラスが15名程度ということになり、少人数教育と言えるだろう。一橋大学以外からも約10名の日本人学生（主として麗澤大学）が参加しており、初心者向けのクラス（1, 2）では、半数が日本人というケースも見られた。（一橋の学生は、クラス分けテストの結果、1~6クラスに配属されたが、大半が2年生ということを考えれば、嘆く理由はないのかもしれない。）

午前中は、教室でのドイツ語授業、午後には、実践の中でドイツ語を学ぶ、「モジュール」と呼ばれる形式の授業が行われた。例えば、絵を描きながら、ラジオ番組を作りながら、ダンスをレッスンしながら、ワイマールの街を歩き歴史や文化を学びながら、音楽を楽しみながらドイツ語を学ぶ、というコンセプトである。（どのモジュールを選ぶかは、申し込みの段階で決めておく必要がある。）

授業以外には、頻繁にパーティが開かれるほか、ワルトブルク、ドレスデン、ベル

リンへのバス旅行なども企画された。

**【3】** スタートの年であり、一回目の経験ということもあったので、危機管理という観点から、デーゲンが往復の旅程に同行した。その点での心配は杞憂に終わり、何のトラブルもなく、全体として成功したと言える。それは、とりわけ、学生諸君の満足度という点で言えることで、帰国後に作成された報告集に如実に表現されている。

他方で、問題点も指摘される。

まず、ワイマール滞在中はともかく、出発前の約六ヶ月間における学生諸君のドイツ語学習意欲を高めるにはどうすればよいのか、という問題である。ドイツ語教材については大々的に提供されたわけだが、ほとんど活用されなかった。これは、なぜこのプログラムに参加するのか、という動機の問題とも関わっている。というのも、少なからぬ学生にとっては、(初めて)外国生活を体験するということが重要であり、ドイツである必然性は必ずしも大きくなかったようだ。短期語学研修というこのプログラムが、本来、語学教育の一環として立ち上げられたことを考えると、今後の改善課題の一つであることは間違いない。

第二に、ワイマール滞在中に、ドイツ人や外国人学生との交流がどれだけ行われたのかという点も、いささか心許ない点ではある。「日本人は外国人と接する時間が長くなればなるほど衰弱していくのは何故なのか」という問いが、ついつい浮かんでしまう(デーゲン)というのである。もっとも、「日本人は」ともあるように、これは一橋の学生に限った話ではない、とも言わねばならないのかもしれない。

第 251 回 2011 年 2 月 16 日

「新自由主義の文化を研究しなければならない」

三浦玲一／河野真太郎

三浦と河野が、およそ月一回の割合で開催している新自由主義研究会の状況を報告しながら、現在の英米の文化(そして現在のわれわれの文化)を、新自由主義の文化としてとらえることの意味を論じた。具体的には、アメリカの映画や英国の小説の分析から、新自由主義の文化とはどのような特徴を持つものかを説明し、その後の議論に発展させようと試みた。有志により自由に行っている新自由主義研究会も、始めて約二年になるが、その紹介と成果報告という意味合いもあった。

まず三浦が、20世紀後半に続々と登場した新自由主義(ネオリベラリズム)的な政策をとる政府の歴史を簡単にたどり、その基本的な特徴を整理した。われわれにとって一番馴染み深い新自由主義的な政策とは、小泉内閣の行ったそれであり、もっとも端的には、この政権の最大の課題だった郵政民営化に象徴されるような、公的機関の民営化による、「大きな政府」から「小さな政府」へのシフトである。第二次世界大戦後から(いわゆる東側諸国の社会主義、共産主義と同時に)いわゆる西側諸国で、種々の政策決定の基本的な枠組みとして提示されてきた福祉国家という枠組みが棄却され批判されることに、新自由主義化の大きな特徴がある。

このような変化が文化の領域にどのように反映されているかを確認するため、二つのハリウッド映画『タワリング・インフェ

ルノ』(一九七四年)と『ダイ・ハード』(一九八八年)を比較した。

福祉国家期の最終期とも言える時期に作られた前者の映画は、1) 集団的に社会の安定に寄与する消防士に捧げられ、2) 法的基準値以上の安全基準を求めた建築家が善の英雄として主人公の一人となり、3) 富裕者の強欲と縁故主義の腐敗が悪として示される。

対して、新自由主義期に登場した後者の映画は、1) 官僚制を批判する個人主義的な英雄が、個人の柔軟な能力によって問題を解決するという主題を持ち、2) 高層ビルにおけるパニックという前者の構造を反復しつつ、物語の真相は、資本の移動であると示され、3) 対独、対日という第2次世界大戦のレトリック(であり、文明の衝突論を先取りするもの)を示しながら、4) 仕事を持つ妻との和解という結論を示している。

前者のテーマが二一世紀の現在においてほとんど顧みられることのないそれであるのに対し、後者は、グローバル化、そこにおける柔軟性の重視、終身雇用/核家族制度の終焉といった、新自由主義体制が重視する今日的なテーマを扱っている。

河野は、カズオ・イングロの小説『日の名残り』にグローバリズムと新自由主義を読んだ。まず、この小説のテーマとされることの多い、主人公スティーヴンズの「労働倫理」について。作品の結末でスティーヴンズは、執事としての自己の資質をさらに更新していこうと決意するが、これはグローバル化下の労働の形態としてしばしば指摘される、ポストフォードイズム労働もしくは情動労働の姿である。それはまた、グローバル化＝サミット体制において推進される、「生涯学習」の

理想にも合致する。

この議論はさらに、『日の名残り』の文化形式を検討することで補完されなければならない。『日の名残り』は、イギリスのエステイト小説の伝統に属するよう見えながら、じつはそのパスティーシュ、もしくはブランク・パロディである。フレドリック・ジェイムソンにしたがえば、このような、ポストモダンなブランク・パロディは後期資本主義(＝金融資本)の文化形式である。エドワード・サイードとジェイムソンが指摘するように、エステイト小説の伝統はその「不在の原因＝生産の場」として植民地をもっていた。そのような伝統そのものをパスティーシュの対象とする『日の名残り』からは、そのような生産の場の痕跡は完全にぬぐいさられているように見える。ジェイムソンの用語で言えば、これはまさにグローバリゼーション下の金融資本の、生産の場にしばられないまったき流動性に合致するよう見えるということだ。

しかし、『日の名残り』は、完全にグローバルでフラットな地政学のみに基づく小説なのか。唯一指摘できる、この小説の「不在の原因」は、ジョン・サザーランドが指摘する「スエズ戦争の不在」である。1956年に設定されている小説の現在時は、スエズ戦争勃発後であると推定されるが、登場人物たちの政治談議でふれられてしかるべきスエズ戦争が奇妙にも不在なのである。これは、石油の生産地＝中東を中心とする世界の地政学の隠蔽である。しかし、モダニズム作品における症候的な象徴(たとえば『ハワーズ・エンド』の「無限」)のように、スエズ戦争の不在が認知地図の全体化に資するところは少ない。純然たる不在でしかない。